

■ 住職戯言



「延命十句観音経」

「人として」

大徳寺派竺園寺 渡邊恭山

今年は、臨済宗中興の祖である白隠禅師がお亡くなりになってから二百五十年の遠忌の年になります。

その白隠禅師は、『八重葎卷之二』に『延命十句経霊験記』を書かれており、熱心に『延命十句観音経』の普及につとめていたことはよく知られていることです。

観音菩薩は、慈悲の菩薩です。慈悲とは、悲しみを共にして安楽を与えようと願うことです。

白隠禅師は、『延命十句経霊験記』において、朝な夕なに『延命十句観音経』を念じて、自己を深く見つめることに止まらず、そこに安住してはいけない。そこからさらに、一歩進めて、あらゆることを学び人々を利益し、共に歩み、救いたいと願い、誓うことが、大事であると私たちに戒めます。

私の住む千葉県市川市に、江戸三大鬼子母神の一つがあります。

江戸三大鬼子母神とは、豊島区雑司が谷の法明寺、台東区の「恐れ入谷の」真源寺の鬼子母神と千葉県市川市の法華経寺の鬼子母神というのが通説とされています。

江戸から少し離れている市川のお寺が江戸っ子に人気があったと言うのは、驚きです。

鬼子母神は、もともと古代インドでは、夜叉の娘の鬼女とされ、たくさんの子を産んだと言われます。

その数は、500とも1000人とも言われています。

鬼子母神は、ハーリティーと言います。自分の子には、たいへん優しい母でありましたが、人間の子には、取って食われてしまう鬼女として恐れられていました。

お釈迦様は彼女の過ちを正そうと、最も可愛がっていた末の子プリヤンカラを神通力で隠しました。ハーリティーの悲しみと嘆きは、鬼女に子を食われてしまったすべての親と同じであると論じたのです。

ハーリティーは、過ちを深く悟って仏教に帰依し、母や子を護る慈悲の神となったのです。以来、鬼の字の「角」のとれた鬼子母神となったと言われていました。

悲しい心を共にしていることを自覚することが、慈悲の心になるということです。悲しい心を共にしていることを自覚した時、鬼女の角が消え去り、鬼を鬼子母神という母と子を護る神にしたのです。

慈悲の心は、鬼を鬼子母神という神にしました。私たち人にとっては、慈悲とは、何なのでしょう。白隠禅師の作と伝えられている『善悪種蒔和讃』に、「人といふ字がそのままに、慈悲といふ字と心得よ」という一節があります。

人という字は、甲骨文字の時代、人が立った姿を横から見た形からできました。しかし、一本棒ではありません。人偏の形に似ています。似てはいますが、よく見ると、腰を少し屈めて、片手をずっと伸ばしたような形です。まるで、道に迷って蹲ってしまった人に思わず手を差し伸べるような形です。

「人といふ字」の前節に「なさけなければ人でなし、」という一節があります。

人には本来、蹲ってしまった人に手を差し伸べる「なさけ」という本心があるのです。

その「なさけ」という本心は、私たちが人として生きているという証しなのです。

松原泰道師の『今日を生き抜く智慧』に私の住む市川市の養護学校の服部正弘君の詩があります。

わたしは ローソクです
わたしが消えるまで
ひとつ いいことを
していきたい
わずかな
ひとときの いのちを
わたしは むだにしたくない

今は、市川市立須和田の丘支援学校と名を変えています。隣に市川市立の第二中学校があります。

私のいるお寺の近くにありますが、朝夕に登下校の生徒さんたちを見かけますが、隣の中学校の生徒さんたちの元気な姿の方が目につきます。

松原師は、「とかく世間から置き去りにされがちな、こうした不遇の少年が却って真実な生き方をしているのに、手をあわさずにおれません。

ローソクは、自分自身を燃やし減らしながら、自分の周囲を照らしているのです。仏前にローソクを捧げるのは、実はこの誓いであり、それはまた取りも直さず仏の願いにほかならぬことを示されるのです。

ローソクが燃えつきるのは、短い時間ですがその間にでも、ひとついいことをしていきたいと、この少年は願っています。」と言います。

白隠禅師は、人々と共に歩み救いたいと願い誓うことが大事であると言いました。

その願いを持つことは、ハーリティーという鬼女ですら鬼子母神という母と子を護る慈悲の神にしてしまいました。

その願いを持つと言うことは、私たちが、「なさけ」という本心を具えて、人としてあることの証しでもあるのです。

『延命十句観音経』を念じる時、人としてあると言うことは、どういうことなのか。自分自身の本心としての「なさけ」とは、何なのかを問い直してみたいと思います。